

「學徒海洋教練報告1942」に觀る海洋教育に関する 若干の考察

著者	村井 康二
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	15
ページ	33-36
発行年	2019-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001658/

[資料]

「學徒海洋教練報告 1942」に観る海洋教育に関する若干の考察

村井 康二*

(Accepted November 30, 2018)

A Few Comments on Marine Education from the Marine Training Report 1942 in Kobe Maritime College

Koji MURAI*

Abstract: Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT) has been educating students “all round education” based on the marine education and research. The marine education is one of important aspects to success “all round education” quickly in TUMSAT. In this paper, “The marine training report 1942 in Kobe Maritime College” is introduced as historical data; we re-confirm that the basis of aim and method of the marine training never change, and the marine education should be well-known in Japan.

Key words: Marine education and training, University student, Navigation, Human resource development

1. はじめに

本稿は、昭和十七年八月、神戸高等商船学校にて実施された「學徒海洋教練」の報告書を資料として紹介する。そして、本学が海洋系教育の一手法として継承し、教育研究している海洋実習が我が国の歴史的観点からも、学生の人材育成のための社会に広く認知された普遍的な全人教育手法の一つであることを当該報告書にみられる感想から若干の考察を行うものである。

「學徒海洋教練報告」(図1)は、目次と135ページの報告からなり、その構成は學徒海洋教練實施方案(4頁)、教官擔任事項(1頁)、開所式次第及閉所式次第(1頁)、學徒海洋教練受講者名簿(3頁)、教練日誌(2頁)、信號術教練經過概要・所見並ニ成績(5頁)、海洋教練學徒感想(118頁)からなる。

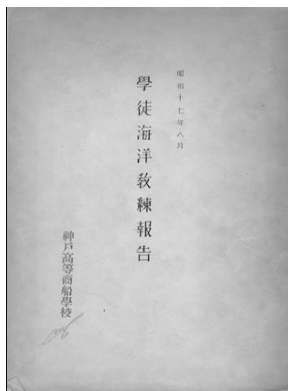


Fig. 1. The marine training report 1942 (cover page).

2. 海洋教練と時代背景

本報告書の年代からわかるように時代背景としては大東亜戦下であることから、水産も含めて海軍、商船については、海洋人を育成することは国策として重要事項であり、青少年に対しては大日本海洋少年團が大正十三年十二月に、大学生らに対しては大日本學徒海洋教練振興會が昭和十七年一月十七日に設立している¹⁾³⁾。

學徒海洋教練振興會は、文部大臣を會長として、海軍、文部、農林、厚生等々と協力し、その教練を実施するための組織として、東京、神戸両高等商船学校、水産講習所、各地方商船、水産学校等々が各々の練習船、施設等を用いて実施することと予定している⁴⁾⁵⁾。

四方を海で囲まれた島国である我が国にとっては、海洋への認識を国民に広め、積極的に教授する必要性が国策としても必要であったが、その時勢によらずとも開国した日本にとって、海洋教育は現在も必要不可欠であり、海事思想普及に継続的、発展的な努力を必要としていることには変わりはないと考えられる⁶⁾。

大日本海洋少年團での教程は、対象学年により実施内容のレベルは当然ながら異なるが、“精神修養”、“海事研究(海洋、船舶、海軍、海運、水産、航空等の諸項)”、“海技訓練(各種信號、結索、操艇、水泳、登樁、測深法、その他)”、“一般訓練(海上生活、巡航、各種見学、國防、海浜生活等)”、“奉公實踐(祭典奉仕、銃後生活、美化清掃、災禍作業、交通整理等)”が取り上げられている⁷⁾⁹⁾。また、精神修養となる心身錬成は、“出船の精神”、“海訓”

* Department of Maritime Systems Engineering, Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6 Etchujima Koto-ku, Tokyo 135-8533 Japan (東京海洋大学学術研究院海事システム工学部門)

八項（清潔整頓、時間励行、迅速確實静肅、注意周到、不言實行、臨機應變、一致協力、鍛心鍊技）として海洋系の特殊性を特色とした内容になっている^{9),10)}。學徒海洋教練もこれらと同様の実施方案となっている。

さらに學徒海洋教練の実施については、学生らの氣運の高まりによって、その実行に至っていることは、まさに戦時下である時代背景によるものと考えられる²⁾。

本学の前身である東京高等商船学校では、都下中等学校生徒を対象として昭和十八年七月（一日入学）に、全国中学校上級生を選抜して昭和十九年八月（四泊五日）に本学に於いて実施している¹¹⁾。

3. 「學徒海洋教練實施法案」

本章では、昭和 17 年（1942 年）に神戸高等商船学校で実施された學徒海洋教練の内容について紹介するため、その実施方案について以下に列記する。

1) 學徒員数

百五十名（大學高専五十八校ヨリ選抜）

※浪高、大阪高、甲南高、関學高商、大阪高工、昭和高商、関西大、神高商、甲陽高商、大阪帝大、京都薬専、早大専、帝大教養 等々関西を中心とした参加者（学校名は報告書に記載された名称）。

2) 日時

自八月三日（月）午後三時、至八月九日（日）午前十時

※一週間の実施。

3) 場所

・教場一講堂、八教室、十教室、十四教室、製図室、模型室、器械室。・寝室一生徒寝室。・食堂一生徒食堂。・浴場一生徒浴場。・洗面所及便所一新築生徒洗面所及便所。・診療所一病室。

※学校施設を使用。

4) 總務

教頭

5) 教官

・主任指導一〇〇教授。・學徒隊指揮官一〇〇少佐。・連絡兼内務係一〇〇特務中尉。・學徒隊長一〇〇特務少尉。・指導官一教授 3 名、助教授 2 名、講師 1 名、囑託 1 名。・學徒隊指揮官附一教員 2 名、技術員 1 名。・講師一〇〇神戸海務局長、教授 3 名、講師 1 名。（〇〇は担当者の名前）

※約 30 名体制で実施。

6) 扁成

七班（各班約二十一名）

班長ハ各班學徒中一名ヲ之ニ當ツ

本校生徒指導補助員ハ各班附トス

※神戸高等商船学校学生を補助員として採用。

7) 日課

0500 起床、洗面

0520 宮城遥拝^{12),13)}、體操始メ

0535 體操止メ、別科始メ

0630 別科止メ

0715 朝食

0800 國旗掲揚、朝禮

0830 課業始メ

0955 課業休メ

1005 課業始メ

1130 課業止メ

1145 晝食

1315 課業始メ

1600 課業止メ

1615 別科始メ

1715 別科止メ、入浴

1830 國旗降下、夕食

1930 別科始メ

2030 別科止メ

2100 巡檢用意

2115 巡檢（就寢）

※體操は海軍體操^{14),15)}。

8) 實施予定表

實施内容は、講義として航海術大意、運用術大意、航海計器、実技として結索、手旗信號、端艇、帆走、内火艇、水泳、發光信号、星座である（図 2）。

The figure shows a complex schedule grid for marine training. The vertical axis represents the days from August 3rd to 9th. The horizontal axis represents the time of day, divided into morning (0500-1130), afternoon (1315-1600), and evening (1615-2115) sessions. Each cell in the grid contains specific activities such as '起床洗面' (wake up, wash face), '宮城遥拝' (remote prayer to Miyagi), '體操' (physical training), '別科' (specialized courses), '朝食' (breakfast), '國旗掲揚' (flag raising), '課業' (lessons), '晝食' (lunch), '國旗降下' (flag lowering), '夕食' (dinner), and '巡檢' (inspection). The right side of the grid is labeled '海洋教練實施予定表' (Marine Training Schedule).

Fig. 2. The schedule of marine training.

9) 受講者名簿

一班から七班までの各班の氏名、所属校が表として記載。

10) 教練日誌

実施内容がタイムスケジュールとして列記(図3)。天候の状況により実施についての調整が行われている。

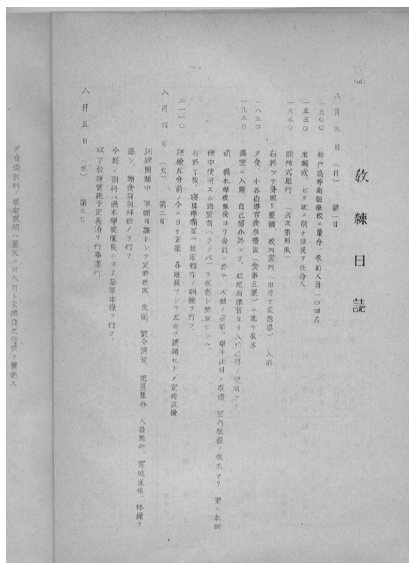


Fig. 3. The daily record of marine training (p.10, the first page of section).

11) 所見並ニ成績

優 90 - 100、甲 70 - 89、乙 69 - 50、丙 49 以下トス ※100 点満点。 ※發光信號を除き平均は 90 点以上

12) 感想

感想は参加学生と生徒指導補助員(本校学生)により記載され、一人1ページ程度(図4、黒塗り部分は個人名)。

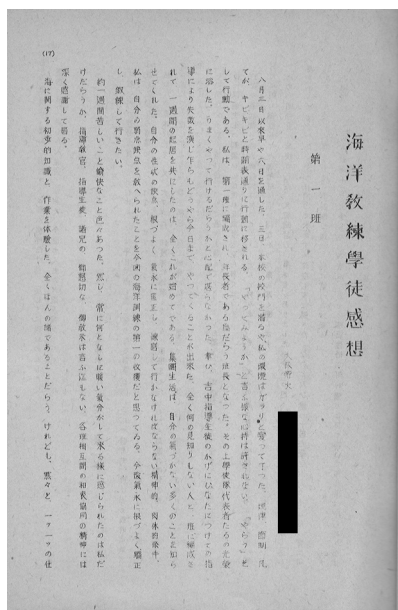


Fig. 4. The student's impression (p.17, the first page of section).

4. 學徒感想と考察

参加学生 150 名、指導学生 7 名の感想文から、印象に残ったとされる点について、内容として重複するものも複数あるが以下に列記する。

(参加学生)

- ・環境の変化：規律、節制、作法、敏速、沈着
- ・集団生活、共同生活：協力
- ・精神力の尊さの体得
- ・生徒と教官との親和、一体
- ・師弟関係の親密さ
- ・食事五観¹⁶⁾⁻²⁰⁾
- ・出船の精神
- ・一致協力の精神
- ・5分前集合
- ・肉体的訓練と精神的訓練の両輪
- ・自分の弱点の発見
- ・人生の糧
- ・自己を伸ばす生活
- ・海軍生活、商船学校生活、海軍魂、海員魂、海洋精神
- ・海への理解、船への理解、海員への理解
- ・海運の月月火水木金の理解
- ・海の男、海の人、シーマン
- ・航海術への興味
- ・海洋教育の不足
- ・海の観念がない
- ・現今の学校教育を考える
- ・当校独特の殺人的猛訓練
- ・「若い内の苦勞は買ってでもせよ。」
- ・「やる時にはやり遊ぶ時には充分遊ぶ」
- ・「雄辯は銀にして、沈黙は金なり」
- ・「海を制する者は世界を制す(海國)」
- ・「苦しみの中にこそ眞の楽しみあり」
- ・「求めよされば興へられ」「攻撃は最大の防禦なり」
- ・観念的な説明的教育ではなく、すべてを体験し体得させる、いわゆる行いを以て終する事
- ・適切なる理論なくしては駄目ではあるが、すべからく実践的であらねばならない
- ・不言実行
- ・座学の内容が少し物足りない

(指導学生)

- ・海事思想普及
- ・他大学学生との交際の機会

以上の内容から、参加学生は共同生活と人とのチーム作業について非常に良い経験をしたとしており、また、その実行の中で規律、節度、作法の大切さを体験、実感してい

る。また、航海術や運用術といった海洋系の基礎知識を受講して、海洋教育が社会にあまり普及しておらず、またその普及が重要であることの認識を得ている。さらに実践（実行）を重視する実学であることの素晴らしさの気づきとともに一週間という時間的制約からと考えられるが、座学の内容としては少し物足りないという“理論と実践”に対する教育のバランスの重要性について考える必要がある余地を残している。これらのことは、現在の海洋教育における同様の課題であるとも考えられる。

5. おわりに

海事思想普及、海洋教育の継承・実施は、一度、途絶えてしまうとそのノウハウを再構築することは困難であり、かつ多くの時間を費やす。ビッグデータ、ディープ・ラーニング、Artificial Intelligence (AI) はもちろん科学的アプローチとして発展的に必要であるが、学問の基礎部分が不変であるのと同じく、人間教育も時代によらない普遍部分は多い。時代は異なるが、海洋教育を行うもの、学ぶものの人数が全くもって不足しているという同じ問題を今も抱えていると実感する。

最後に、本資料は当該教練に指導官として参加された教授が後進のものへと残した海洋教育の初期の時代に実施された歴史的にみて貴重な資料の一つである。本学が継承する海洋系全人教育の時代が変わらぬ普遍的な教育原点の手法について鑑み、これからの海洋教育を考え続ける一つの資料となれば幸いである。

参考文献

- 1) 海事団体要覧(昭和19年版). 亜細亜書房, 1944, p.158-164.
- 2) 日暮豊年. “學徒海洋教練振興會は如何にして生まれ如何なる針路を行かんとするか”. Kazi. 舵社, 1942, 11(3), p.50-51.
- 3) 日暮豊年. “海洋道場は諸君を待ってゐる”. 鶴洋. 舞鶴海軍人事部鶴洋会, 1945, 第5号, p.8-14.
- 4) 學徒海洋教練ニュース. Kazi. 舵社, 1942, 11(3), p.93.
- 5) 小石清. “吾妻艦上の學徒海洋教練 - 舞鶴 -”. 写真週報. 情報局, 1942, (234), p.18-19.
- 6) 植松尊慶. 写真海洋少年団. 東亜書林, 1945, p.17-34.
- 7) 植松尊慶. 写真海洋少年団. 東亜書林, 1945, p.123-127.
- 8) 植松尊慶. 写真海洋少年団. 東亜書林, 1945, p.135-167.
- 9) 植松尊慶. 写真海洋少年団. 東亜書林, 1945, p.35-79.
- 10) 海洋訓練研究会を開催して. 鶴洋. 舞鶴海軍人事部鶴洋会, 1945, 第5号, p.59-69.
- 11) 東京商船大学百年史編集委員会編. “東京商船大学百年史”. 東京商船大学百周年記念事業委員会, 1976, p.253.
- 12) 山崎力之介. “学校経営細案: 計画・事務・行事 昭和12年度版”. 第一出版協会, 1937, p.135.
- 13) 山口和喜子. “宮城遥拝の詞”. 禊祓行事と神拝作法, 教学書房, 1943, p.119.
- 14) 鈴木光長. “海軍体操教範”. 水交社, 1894, 83p.
- 15) 海軍体操解説. 川崎汽船, 1942, 48p.
- 16) 藤秀翠. “聖者と人間”. 現代真宗名講話全集 5. 教育新潮社, 1967, p.233-239.
- 17) 山崎益州. “大道を行く”. 広島通信局広島逓友会, 1935, p.14-34.
- 18) 莊司義孝. “仏教医学上より観たる「食事五観文」の研究(その一)”. 宗教公論. 宗教問題研究所, 1963, 33(2), p.13-17.
- 19) 莊司義孝. “仏教医学上より観たる「食事五観文」の研究(その二)”. 宗教公論. 宗教問題研究所, 1963, 33(4), p.25-28.
- 20) 莊司義孝. “仏教医学上より見たる「食事五観文」の一研究(その三)”. 宗教公論. 宗教問題研究所, 1963, 33(5), p.14-17.

「學徒海洋教練報告 1942」に観る海洋教育に関する若干の考察

村井 康二

(東京海洋大学学術研究院海事システム工学部門)

本稿は、昭和十七年八月に神戸高等商船学校で実施された「學徒海洋教練」の報告書を資料として紹介するとともに、現在、本学が継承し、教育研究している海洋系実習が歴史的にみても学生の人材育成のための社会に広く認知された普遍的な全人教育手法の一つであることを当該報告書にみられる感想から再確認するとともに、海洋国日本における海洋教育の社会的認知度向上の必要性と重要性について若干の考察を行うものである。

キーワード: 海洋教育、大学生、ナビゲーション、人材育成、高等商船学校